特集 その先の藍へ

水の文化55号　2017年2月

私たちの身のまわりにはさまざまな色がある。では「水」を色で表すと何色なのか。すぐに思い浮かぶのは「水色」だろう。水色は青系統の色だ。その青系統の色のなかでも、特に庶民の暮らしに多く用いられたのは藍色である。

明治時代の初めに日本を訪れたロバート・ウィリアム・アトキンソンが、藍色の衣服を身につけた日本人を数多く目にして、「ジャパン・ブルー」と称したのは有名な話だ。外国人の目に印象深く映った藍色は、日本人の生活を彩る代表的な色だったのだ。

あまり知られていないが、藍色には非常に多くの種類がある。今は藍色といえば濃いめの紺色をイメージするかもしれないが、「水色」「縹色」「甕覗き」「水浅葱」といった淡い色も藍色の範疇に含まれる。

明治時代中期に合成藍が輸入されるまで、日本の藍色は蓼藍を発酵させてつくる「蒅」という染料を用いて染められ、色の濃淡は染める回数などで調整していた。先人たちがさまざまな技術と工夫で多様な藍色を生み出したように、今も藍色にこだわったものづくりを続ける人たちがいる。藍色には日本人特有の何かがあるのだろうか。識者、そして藍をものづくりに活かしている現場を訪ね歩いた。

目次

巻頭エッセイ

ひとしずく
2 自然のエレガンス
港 千尋

特集 その先の藍へ

総論
6 日本に溢れる自然が多彩な藍色を育んだ
竹内淳子

藍ミニ図鑑
10 日本の藍・藍染め略年表
編集部

Interview
12 色と文化と心――色彩嗜好の国際比較から
齋藤美穂

現場1
15 藍染め新世代「BUAISOU」の挑戦
BUAISOU

現場2
20 時を刻む木曽漆と有田焼の「藍」
コスタンテ

現場3
24 日本の「青」で世界に通用するジーンズを
株式会社ジャパンブルー

現場4
28 淡い色から濃い色まで自在に染められる「日本の藍」
リンダ・ブラシントン

Interview
32 浮世絵における「藍」の存在感
松嶋雅人

文化をつくる
35 暮らしに根づいた日本の「藍」
編集部

連載

水の文化書誌 46
36 イギリスの川と水
古賀邦雄

食の風土記 7
38 こたつで食べる冬の風物詩 でっち羊かん

魅力づくりの教え 7
40 水・舟運そしてパーソナルネットワーク資本へ
山形県長井市
中庭光彦

Go ! Go ! 109 水系 12
45 大地を削って「遠回り」する肱川
坂本貴啓

50 センター活動報告
51 編集後記／ご案内

（敬称略）

「蒅」を用いた古来の方法で布を染める職人の手
（紺屋「日下田藍染工房」にて）